

# 夜勤・交代制勤務を行う男性看護師の子育て －乳幼児期の子をもつ父親へのインタビューから－

小島さやか 小林 祐子 久保田美雪

新潟青陵大学看護学部看護学科

Parenting by male nurses who work night shifts and shift work: an analysis of interviews with male nurses with infants and young children

Sayaka Kojima Yuko Kobayashi Miyuki Kubota

Department of Nursing, Faculty of Nursing, Niigata Seiryō University

## 要旨

本研究の目的は、乳幼児期の子を持つ男性看護師が夜勤・交代制勤務をしながら行う子育てへの関わりや思いを明らかにすることである。男性看護師6名に半構造化面接を行い、質的記述的研究法で分析した結果、27のサブカテゴリーと5つのカテゴリーに分類された。男性看護師の子育ては、【子育ての一員として関わっている自負】【交代制勤務の強みを活かした時間の調整】【育休取得のあり方を考える経験】【父親としての存在価値を見出すこと】【家庭と仕事の折り合いをつける難しさ】に分類された。

対象者は交代制勤務の強みを活かして家事や育児に関わり、夫婦で協力して家庭を支えていると自負していた。子育てを通して父親である自分の存在価値を見出し、夜勤をしながらの家事、育児に負担を感じつつも折り合いをつけようとしていた。男性看護師への子育て支援として、ピアサポートを活かして子育ての情報交換ができる環境、両立支援のための勤務調整と情報提供、上司や同僚の受容的態度の重要性が示唆された。

## キーワード

男性看護師、交代制勤務、父親、子育て、乳幼児期

## Abstract

This study aimed to clarify how male nurses who are the fathers of infants and young children are involved in parenting while working night shifts and shift work, and how they felt about it. We conducted semi-structured interviews with six male nurses and analyzed the results using a qualitative descriptive research methodology. The results were classified into five categories and 27 subcategories. The five categories comprised self-confidence in being involved in parenting as a member of a parenting team; time management by taking advantage of shift work; experience of thinking about childcare leave; the significance of their role as a father; and difficulty in balancing work and family life.

The subjects were involved in household chores and parenting by taking advantage of shift work and were confident about running their homes cooperatively with their wives. They discovered the significance of their own role as a father through parenting. Although they found household chores and parenting while working night shifts burdensome, they made an effort to balance work and family life. The results suggest that, to support the parenting of male nurses, the key factors are an environment in which male nurses can exchange information on parenting using peer support, arrangement of their work shifts and provision of information to help balance work and family life, and a receptive attitude on the part of their supervisors and colleagues.

## Key words

male nurse, shift work, father, parenting, infancy and early childhood

## I 緒言

看護師全体における男性の割合は増加し続けている<sup>1)</sup>。しかしながら、依然として女性が圧倒的多数の職場であり、男性看護師は身近に看護職として働き続ける男性のロールモデルが少ないと推測される。結婚や配偶者の出産といったライフイベントを迎える世代の看護師は中堅の世代にあたり、家庭のみならず組織においても教育、リーダー業務、委員会活動など中心的役割を担う者として期待されている<sup>2)</sup>。加えて看護職の働き方の特徴の一つに交代制勤務があり、子育てする看護師にとって夜間、休日を問わず働くためには、周囲の協力が不可欠であるが、男性看護師の子育てについては報告が少なく、十分な検討がなされていない。

近年わが国では、父親の育児への関わりが注目されている。父親の子育て支援を推進する社会の背景には、「子育て環境の変化」「働き方改革」「意識の変化」の三点があると考えられる。第一に、共働き家庭の増加、核家族の増加といった「子育て環境の変化」により子育てのマンパワー不足が生じていることから、育児における父親の協力の重要性が高まっている。第二に、長時間労働の是正や労働者のニーズの多様化を背景に、男女ともに働きやすい職場づくり、男性の家庭生活への参画の促進といった「働き方改革」が求められている。2016年に女性活躍推進法が、2019年に働き方改革関連法が施行され、法整備が進んでいる。第三に、女性にとって伝統的役割であった家事や育児が、今や男女共同参画社会のなかで両性が担うものという「意識の変化」がある。「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方(性別役割分担意識)は、男女ともに反対の割合が賛成の割合を上回っており<sup>3)</sup>、日本においては、2010年以降、夫婦が共同で子育てをすることが一般化されている傾向がある<sup>4)</sup>。しかし男性の育児休業

(以下、育休とする)取得率は6.16%と上昇し、1991年に制定された育児・介護休業法が公布されて以降、最も高い値となっているものの、8割を超える女性の育休取得率には遠く及ばない<sup>5)</sup>。これは子育ての主体が未だ母親にあることを意味すると考えられる。

子育て中の女性看護師においては、交代制勤務を行う者の育児不安として、夜勤時の子どもの預け先確保の難しさや、子どもの病気等の緊急時の休暇取得の困難さ、子どもの側にいられないジレンマなどの意見がある<sup>6)</sup>ように、これまで看護職の子育ては、子育ての主体とされてきた「母親」であり看護職の圧倒的多数を占める「女性看護師」の課題として検討されてきた。また、男性看護師については仕事と育児の両立上の困難感について述べた報告がある<sup>7)</sup>ものの、本研究のように病棟に勤務する男性看護師が直面する交代制勤務をしながらの子育てへの関わりを分析した調査は希少である。父親の子育てが推奨される現代において、男性看護師の子育てへの関わりを知ることは、増加し続ける男性看護師の支援の一助となることが期待される。

父親の子育てについては、子に関わる時間や頻度を知る量的側面だけでなく父親自身やその家族が父子の関わりに満足できるかという質的側面についての調査の必要性も指摘されている<sup>8)</sup>。そこで今回、乳幼児期の子を持つ男性看護師を対象として、日常の子育てへの関わりや思いを質的記述的に分析し、今後の支援のあり方について検討したので報告する。

## II 研究目的

乳幼児期の子を持つ男性看護師が、夜勤・交代制勤務を行うなかでの子育てへの関わり方、および子育てを通しての思いを明らかにする。

### Ⅲ 用語の定義

父親の子育て：本研究において父親の子育ては、船橋<sup>9)</sup>が提唱した父親役割の基本的な4要素である「生活費を稼ぐこと」「しつけや教育」「一緒に遊ぶなどの交流」「身の回りの世話」を含む、子を持つ男性の行動として定義する。子育ては具体的な行為に限らず、子の身体的、情緒的、社会的発達の支援や生活に必要な収入を得る等の生活環境の維持も含めたものとする。

### Ⅳ 研究方法

#### 1. 研究対象者および調査期間

対象は病棟において夜勤・交代制勤務を行う男性看護師で、乳幼児期の子をもつ者6名である。対象の選定においては、A県内で男性看護師が勤務する病院の看護部長宛に研究協力依頼を行い、同意が得られた病院の責任者から紹介を受けて対象者に調査協力を依頼した。調査期間は2015年3月～2016年1月であった。

#### 2. 調査方法

調査協力の同意が得られた対象者の希望する日時に半構造化面接法によるインタビュー調査を行った。実施の際には家族は同席せず、場所は調査対象者の希望にあわせ、プライバシーの確保できる個室で実施した。調査に要した時間は30分～44分であった。質問内容は①対象者の基礎情報、②普段どのように子育てに関わっているか、③子育てを通して思うことについてとした。面接内容は、対象者の承諾を得てICレコーダーに録音した。

#### 3. 分析方法

研究デザインは、本人の語りから子育てへの関わり方、思いをありのままに記述し分析するため、質的記述的研究とした。得られたデータから逐語録を作成し精読したのち、データから子育てへの関わり方、子育てを通し

て思うことについて意味ある文脈を抽出した。抽出した文脈を、意味内容を損なわないようコード化した。コードを、類似性や関連性に基づき分類してサブカテゴリーを生成し、さらにサブカテゴリーを集約してカテゴリー化した。分析過程においては、質的研究の研究・指導に携わる研究者からのスーパーバイズを受け、分析の信頼性と妥当性の確保に努めた。

#### 4. 倫理的配慮

対象者に研究の趣旨、研究協力の任意性及び中断、同意撤回の自由、データの管理方法、個人情報の保護、調査結果の公表について文書と口頭にて説明した。文書にて同意を得た後に面接を実施した。新潟青陵大学倫理審査委員会の承認を受けて実施した(2013016号)。

### Ⅴ 結果

#### 1. 研究対象者の背景

地方都市にある3か所の病院の協力を得て、男性看護師6名を対象に調査を実施した。年齢は20歳代2名、30歳代が4名であり、看護師としての勤務年数は6年～14年(平均8.3年)であった。対象者の所属部署は精神科病棟4名、内科系病棟1名、外科系病棟1名である。全員が夜勤を含む交代制勤務をしており、5名が三交代勤務を、1名が二交代勤務をしていた。

家族構成は4名が核家族で、そのうち3名は親世代の近くに住み、1名は双方の両親とも遠方に居住していた。2名は三世同居であった。子どもの人数は1人～3人であった。

育児休業については取得経験のある者が3名、経験のない者が3名であった。なお育児休業ではないが、1名は妻が妊娠中に長期入院した際に1ヶ月の休業を取得していた。妻の就業については、有職者が5名(内、2名は育児休業中)、就業していない者が1名であった(表1)。

表 1 対象者の概要

	年代	勤務形態	家族構成	子ども	育休取得経験・休業期間	妻の就業
A氏	30歳代	病棟勤務 夜勤あり	核家族 (近居)	3人 (8歳・5歳・0歳)	なし (妻が妊娠中に入院した 時に、1ヶ月休業)	あり (育休中)
B氏	30歳代	病棟勤務 夜勤あり	三世代 (同居)	2人 (4歳・2歳)	なし	あり (パート)
C氏	20歳代	病棟勤務 夜勤あり	核家族 (近居)	2人 (2歳・0歳)	あり (第2子、3週間)	なし
D氏	20歳代	病棟勤務 夜勤あり	三世代 (同居)	2人 (2歳・0歳)	なし	あり (育休中)
E氏	30歳代	病棟勤務 夜勤あり	核家族 (近居)	1人 (2歳)	あり (第1子、1ヶ月)	あり (フルタイム)
F氏	30歳代	病棟勤務 夜勤あり	核家族 (遠居)	2人 (5歳・3歳)	あり (第2子、1週間)	あり (フルタイム)

同居：同一家屋に親世代が居住するもの

近居：移動手段を問わず、親世代の自宅との距離が30分以内であるもの

遠居：移動手段を問わず、親世代と自宅との距離が30分以上であるもの

## 2. 乳幼児期の子をもつ男性看護師の子育てへの関わりと問い

分析の結果、乳幼児期の子を持つ男性看護師の子育ては、27のサブカテゴリー、5つのカテゴリーに分類された(表2)。【 】はカテゴリー、< >はサブカテゴリー、[ ]はコード、対象者の語りの一部は「斜体」で示し、対象者の語りを説明するために( )に研究者が言葉を補足した。

### 1) 【子育ての一員として関わっている自負】

このカテゴリーは5つのサブカテゴリーから構成された。子が誕生し実際に育児を体験してその大変さを痛感した対象者が、夫婦で協力して子育てを行う日々の積み重ねを通し、自らが子育ての一員として主体的に家庭生活に関わっていることを自負する様子を示している。

交代制勤務のなかで「日勤の時は保育園の送迎、夜勤の時は昼間に家事を済ませる」など時間を活用して家事や育児を担当し、「夜勤の合間を縫って子どもと外出する」など、我が子と接する時間も大切に<勤務シフトに合わせてできる家事・育児を担う>生活を

していた。加えて「(妻が)子どもの躰とか、すごく子育て頑張ってくれているところがあって、それは子どもが生まれてからの発見なんです。」などと「母親として頑張っている妻に気づく」ことを通して「実際(子育てを)してみると、こんなの毎日しているの大変だになっていのが分かってくる」と<体験してみても育児の大変さを痛感する>経験をしていた。日々の家事や育児は、<妻の動きを見てその時すべきことを考える>ことにしていた。「妻の忙しさを見計らってお風呂、洗濯、料理と手伝うことを考える」ようにし、「役割分担するわけではなく、手が空いていればできることをする感覚」を持っていた。

夫婦は一緒に子育てする同志のような協力関係にあり、互いに「仕事で不在の時の子どもの様子を伝えあう」ことで<夫婦なりの子育てルールが自然にできる>ようであった。特に核家族の者や、「共働きの両親はあてにできない」など両親の協力が得にくい環境にある者は、<夫婦で子育てに向き合うことを決意する>経験をしていた。

表2 乳幼児期の子をもつ男性看護師の子育て

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
子育ての一員として関わっている自負	勤務シフトに合わせてできる家事・育児を担う	日勤の時は保育園の送迎、夜勤の時は昼間に家事を済ませる 夜勤の合間を縫って子どもと外出する 妻が仕事の時は父の立場と母の立場を両方担う
	体験してみて育児の大変さを痛感する	実際に育児を体験してみて、毎日の大変さが分かる 母親として頑張っている妻に気づく
	妻の動きを見てその時すべきことを考える	妻の忙しさを見計らってお風呂、洗濯、料理と手伝うことを考える 役割分担するだけでなく、手が空いていればできることをする感覚
	夫婦なりの子育てルールが自然にできる	仕事で不在の時の子どもの様子を伝えあう 習い事や育て方を話し合うことで、互いの子育て観を知る
	夫婦で子育てに向き合うことを決意する	第二子誕生時に上の子の預け先が確保できず育児取得を決断する 妻に育児取得を求められる 実家の親にとって子守りは体力的に難しい 共働きの両親はあてにできない
交代制勤務の強みを活かした時間の調整	子ども中心の時間配分になる	勤務終了後の勉強会よりも家に帰ることを優先する 休みの日も保育園の送迎の時間に制約される
	子どもの世話のために勤務を調整する	友達と会って遊ぶことが少なくなった 子どもをみるために妻とシフトをずらす
	子どもの病気のときは臨機応変に対処する	子どもが具合が悪いときは夫婦どちらかが仕事を休ませてもらう 子どもの受診は深夜明けでも出かける
	時間の融通を利かせて子育てに関われる良さがある	平日の休みに保育園の送迎ができる 家族で休みを合わせて外出を計画する 定時に退勤して子育ての戦力になれる
	自分のための時間も大切にしたい	自分の趣味に向き合う時間を捻出する 子が成長したら自分の時間を持てると見通しを立てる
育児取得のあり方を考える経験	収入の減少を回避するために働くことを選択する	妻も自分も収入優先で意見が一致する 給料やボーナスが出ない育児よりは年休を選ぶ
	上司の反応が育児をとりにくくする	上司には育児取得を快諾されない感じがした 上司の反応を受けて申し訳ないと謝る
	忙しい時期に休むことへの負い目を感じる	病棟が忙しい時期に休むことを申し訳なく思う 育児を取った同僚の男性が白い目で見られていた
	育児申請作業の煩雑さに苛立つ	不慣れな中で何度も書類のやり取りを繰り返す 先々の収入の見通しが立たない
	受容的な同僚の態度が育児取得を後押しする	休むことを気にしないでいいと言ってもらえた 係の仕事を引き継いでくれる安堵感があった
	育児のおかげで家族との絆が深まる	妻の入院中に上の子とより親密になった 育児中に子どもと妻と一緒に過ごす時間がたくさんあった
父親としての存在価値を見出すこと	育児技術の獲得を実感する	子どもの寝かしつけができるようになった 子との関わりや躰を考えるきっかけになった ずっとそばにいるからこそ子どもの反応や仕草に気付ける
	看護の知識と技術を活かした子育てを実践する	コミュニケーション技術を子に教える 理論に基づいて躰を工夫してみる 看護師の経験が育児に活かせる
	父親の役割を果たしていると自認している	怒るときには親父の出番と思っている 子どもにとって父親はよく遊んでくれる存在だと感じる
	理想の父親像に近づこうとする	感情的にならずに子どもを叱りたい 妻のように上手に子どもを遊ばせたい 子育てに関わる父親になりたい
	父親看護師同士の情報交換をする	自分の子育て体験を伝え合う 同僚の男性と同じように休暇を取る
	家庭と仕事の折り合いをつける難しさ	交代制勤務による子への負い目を感じる
祖父母や親戚の力を借りる		共働きで家事に手が回らない現状がある 仕事で遅くなる時は祖父が子どもを風呂に入れてくれる 近くに住む親戚にご飯を食べさせてもらう
子どもを不自由なく育てたいと願う		夫婦二人とも夜勤の時は、妻の実家に子どもを預ける 子どもを不自由なく育てるための安定した仕事を求める
妻への遠慮から家事への不満を辛抱する		疲れて帰宅すると家事をやりたくない時がある 夫婦関係の悪化を避けて正直な思いは言わない
妻と家事や育児への意見が衝突する		共働きなので妻ばかりに任せられない 互いの頑張りや認め合えず妻と喧嘩になる 夜勤の日の睡眠時間が減ってしまった
仕事と生活のバランスをとる難しさを感じる		キャリアアップに挑戦したいが出来ていない もっと仕事をしたいが家庭に時間を割いている現状がある

## 2)【交代制勤務の強みを活かした時間の調整】

このカテゴリは5つのサブカテゴリから構成された。子どもの予定や体調、生活リズムに合わせて仕事と生活が制約されるなかで、時間の融通が利くという交代制勤務の強みを活かして子育てに関わりつつ、自分の時間も大切にしようと調整して生活していることを示す。

子育て中の男性看護師の日常は否応なしに<子ども中心の時間配分になる>ため、上司の協力を得て<子どもの世話のために勤務を調整する>など仕事と生活の折り合いをつけようとしていた。「独りの時は自由に過ごして好きな時に行動していたけど、深夜明けでも5時には保育園に迎えに行かないといけないし、日中のうちに仮眠して、それから家のことやって」と子どもの生まれる前との生活の変化を感じていた。子どもの急な発熱や体調不良で受診するなど<子どもの病気の時は臨機応変に対処する>必要に迫られることもしばしば起こり、共働きの家庭においては[子どもの具合が悪いときは夫婦どちらかが仕事を休ませてもらう]など、妻との間でやり取りをしていた。

一方で、多忙な生活のなかでも<時間の融通を利かせて子育てに関われる良さがある>とも感じていた。[平日の休みに保育園の送迎ができる][家族で休みを合わせて外出を計画する]など、夜勤があるからこそ平日の自由時間をうまく活用して子どもと過ごしていた。また、[定時に退勤して子育ての戦力になれる]ことを職場の魅力として語る者もいた。さらに、父親として、看護師として生活するだけでなく<自分のための時間も大切にしたい>と感じており、子の世話を妻と調整して[自分の趣味に向き合う時間を捻出する]などの工夫をしていた。

## 3)【育休取得のあり方を考える経験】

このカテゴリは6つのサブカテゴリから構成された。育休取得による収入減少のり

スクや職場への負い目を感じる一方で、育休取得に協力的な同僚の存在に安心感を得たり、家族との絆が深まるといった嬉しい経験を示している。

妻の妊娠期間中に子を迎えるための準備を進めるなかで、育休取得を決断する者がいる一方、<収入の減少を回避するために働くことを選択する>家庭もあった。育休取得を決めた者は、準備を進める過程で<上司の反応が育休を取りにくくする>経験をしていた。

「最初、師長に育休取りたいんですよねと言ったらうーん、みたいな。うんっ、という感じではなかった」「別に嫌だとかシフト上困るとかは無かったけれども、フーンという否定も肯定もされない形で反応されたので、申し訳ないですと伝えました」と[上司には育休取得を快諾されない感じがした]と語り、<忙しい時期に休むことへの負い目を感じた>ため上司に謝っていた。また、「(育休申請を終えた後に)2回ボーナスが減額されますよって言われたり、まったく書類上になかったことを後で言われたりして」、<育休申請作業の煩雑さに苛立つ>経験をしていた。

一方で、職場では<受容的な同僚の態度が育休取得を後押しする>と勇気づけられる経験もしていた。「生まれるんだ、良かったね。抜けるからすみません、とか気にしないでいいよ」と声をかけられ、「係の仕事のことを聞いてくれたので、早い段階から引継ぎをして、安心して」育休に臨めた者もいた。育休を取得してみると、「子どもと嫁と一緒にいられる時間がすごくあってよかった」「この先、一生ないくらい上の子との関わりが親密、濃密になって、子どもが僕に懐いてくれた」など<育休のおかげで家族との絆が深まる>経験をしていた。

## 4)【父親としての存在価値を見出すこと】

このカテゴリは5つのサブカテゴリから構成された。子に関わることで育児技術を獲得し、時には看護の専門知識と技術を活用

した子育てを実践することで、家庭において父親としての役割を果たしている充足感を持ち、より理想の父親像に近づこうとしていることを示している。

忙しい日常の中で「子どもの寝かしつけができるようになった」り、「子との関わりや躰を考えるきっかけになった」など、子育ての体験を前向きに受け止め「育児技術の獲得を実感する」様子がみられた。さらに、「子どもにとって父親はよく遊んでくれる存在だと感じる」「怒るときには親父の出番と思っている」と自らの存在価値を見出し、「父親の役割を果たしている」と自認していると考えていた。子どもとの接し方においては自身の父親や妻と比較して「理想の父親像に近づこうとする」思いがあり、「子育てに関わる父親になりたい」「妻のように上手に子どもを遊ばせたい」「感情的にならずに子どもを叱りたい」と自分なりに具体的な目標を定めていた。

子どもに対して「看護の知識と技術を活かした子育てを実践する」ために「看護師らしく、ただの親父じゃなくて看護師の親父としてもっとできる工夫」はないかと考え「コミュニケーション技術を子に教える」などしていた。また、沐浴など「看護師として子どもを扱う経験があった」ことで「看護師の経験が育児に活かせる」ことを自身の強みとして感じていた。

職場においては、男性看護師同士で「みんな初めて同士なので、自分の子の（誕生の）時はどうだったとか話をする」など「父親看護師同士の情報交換をする」ようにしていた。情報交換を通して仕事と子育てを両立する方法を探り、子の誕生の時には「（妻の出産時期が近い）同僚の男性看護師さんと同じような休みの取り方をした」などの工夫をしていた。

#### 5)【家庭と仕事の折り合いをつける難しさ】

このカテゴリーは6つのサブカテゴリーから構成された。子どもを不自由なく育てたい

という願いがありながらも、交代制勤務と育児の両立の難しさに加えて家庭内の家事と育児の両立の大変さにも直面しており、親族から育児の協力を得たり、妻との意見の衝突に葛藤しながら何とか折り合いをつけようと対処する様子を示している。

対象者は、「夜勤の夜は子どものそばにいられない」など「交代制勤務による子への負い目を感じる」ゆえに「子どもを不自由なく育てたいと願う」ことから、より安定した仕事を求める気持ちを持つ者もいた。基本的には夫婦二人で協力して子育てしながら、「祖父母や親戚の力を借りる」必要性も感じていた。「仕事で遅くなる時は祖父が子どもを風呂に入れてくれる」など子どもの世話を助けてくれる存在が力になっていた。「お母さん（妻の母親）が躰も全部してくれるので安心」と、協力してくれる家族がいる安心感も語られていた。家事については「早く帰って手伝うって言わないと…。（家事をしたくないと）正直に言って夫婦関係が悪くなるのも嫌だし」と妻への遠慮から家事への不満を辛抱する「時もあった。[共働きなので妻ばかりに任せられない]現状は十分に理解しながらも、時には「お互い、こっちだって頑張ってるんだよ」と言い合って、それがかみ合わないと喧嘩になる」という「妻と家事や育児への意見が衝突する」経験をしていた。子の世話や家事に時間を費やすために「夜勤の日の睡眠時間が減ってしまった」ための疲労感や、「キャリアアップに挑戦したいが出来ていない」など「仕事と生活のバランスをとる難しさを感じる」現状に対処しようとしていた。

## VI 考察

本研究の対象である乳幼児期の子をもつ男性看護師の語りから、父親として経験する子育てへの関わりと、夜勤・交代制勤務を行う看護師ゆえに抱える思いや経験する状況への

対処が特徴として示された。

### 1. 交代制勤務と子育てとの両立

交代制勤務という時間的な制約があるなかでやり繰りをし、自分なりに工夫して暮らす父親の様子が表れていた。対象者は母親の補助的役割として家事や育児を負担するのではなく、夫婦が対等な立場で子に向き合い、家庭での役割を果たそうとしていた。妻と子、家族全体の様子を見ながらその時に必要なことを行い、臨機応変に時間を調整し子どもとの時間を作り、時には周囲の支援も得て家庭と仕事との両立を図っていた。

しかし交代制勤務をする看護師にとって、子どもの生活スタイルに合わせて毎日同じ時間に同じ役割を担うことは困難である。また看護師は看護記録、人員不足、研修会への出席、患者の緊急対応等により時間外労働が発生する<sup>10)</sup>ことが指摘されている。対象者は、夜勤や時間外労働などで子どもの世話が出来ない状況が生じないように、上司に依頼して勤務を調整したり、時間の融通を利かせて日々の子育てを乗り切っていた。子どもの病気などの突発的なトラブルに臨機応変に対応できる背景には、チームで業務を共有して患者のケアにあたるという看護業務の特性ゆえに、互いの仕事を補いやすい環境にあることも推測された。

交代制勤務をする女性看護師においては、母親としての役割と職場での役割との間で葛藤を抱きながら仕事をしている<sup>11)</sup>と指摘されているが、本研究により看護師が子育てと仕事の両立に葛藤する思いは男女ともに共通することが示された。安心して子育てをし、働き続けるためには、看護師本人が納得して働ける勤務体制を整えることも重要である。また、子育てに受容的な上司や同僚の態度があることは、安心して子育てに関われる状況を生み出す。子育てをしながら働き続ける姿は、家庭と仕事を両立するよきロールモデルとなることが期待できる。

### 2. 男性看護師にとっての育児休業取得

育児休業を取得した者においては、休業中に子どもの成長を間近で見ることへの喜びを感じていた。育児休業を取得した父親は、子どもに関わる時間が増えたことで子どもとの関係が親密になることが明らかになっており<sup>12)</sup>、本研究も同様の結果となった。

一方で、対象者は育児休業取得を躊躇する理由として、先々の収入の見通しが立たないことや上司の受容的ではない反応、病棟が忙しい時に仕事を休むことへの負い目などを語っていた。女性の場合は労働基準法により出産日に合わせて休業時期が定められているため、「休業の取得時期を調整する」という発想になりえない。病棟が忙しい時期に休むことを申し訳なく思うのは、出産、育児の時期を選ぶ余地のない女性労働者には当てはまらない男性特有の難しさである。男性の育児休業が進まない理由には、代替要員が困難・取得した前例がない・上司・同僚の理解不足<sup>13)</sup>に加え、職場での自身の立場や評価が気になり申請しづらい<sup>14)</sup>ことが挙げられる。上司からの承認は、やりがいを持って職業を継続するうえで重要な要因である<sup>2)</sup>ことから、看護師本人の望む子育てや働き方を選択することを受け入れる風土があれば、やりがいを持って職業を継続することにつながるだろう。

ただし、男性が育児休業を取得することが全ての家庭にとって最良の子育てのあり方ではないことは留意すべき点である。父親自身や配偶者が育児休業取得を望んでいない場合が一定数は存在する<sup>15)</sup>。また、男性と配偶者の年収が高くなるほど育児休業割合が高くなる傾向がある<sup>15)</sup>ことから、各家庭の考えや経済状況により、育児休業をどう決断するかは異なる。育児中は雇用保険から育児休業給付金が支給されるものの、産休や育児で仕事を休む妻に加え、父親の収入が大幅に減少することは家庭にとって大きな不安材料になる。職場に求められることは、育児の制度や収入の変化に

について詳しく情報を提供し、看護師が納得した上で育休取得をするか選択できる支援と、本人たちが熟慮した上での決定を尊重することである。

### 3. 子育てを通して見出す自己の存在価値と望むワーク・ライフ・バランスの実現

対象者は育児の大変さを痛感したことで、親として子どもに関わる必要性を自覚していた。母親として頑張る妻と協力し、理想の父親像に近づこうと成長するあり様が語られていた。時には家事や育児に対する意見の衝突を経験し、疲れて家事に向き合いたくないと思い、負担感を経験していたが、自身が看護師としてもつ看護技術やコミュニケーションスキルといった強みを認識し、それを活かした子育てを実践することで親としての自信を高める様子が見られた。さらに父親看護師同士のピアサポートを活用し、情報交換を通して自分なりの子育てへの関わり方を模索していた。子育ては、子の成長・発達を援助するのみでなく、親の側も成長・発達をとげる相互発達の営みである<sup>16)</sup>。また、子育てで生じる様々な場面に直面し、それを乗り越える経験を通して親として発達する<sup>17)</sup>。そして子の世話を通して成功体験をすることにより父親としての自覚と自信を持つ<sup>18)</sup>とされている。男性看護師が、子育てを通して成長・発達していくことが本研究の結果からも明らかとなった。

男性看護師は、女性多数の職場という職業的背景があり「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」といった性別役割分担意識をもつ者が一般男性と比べ非常に少ないことが明らかになっている<sup>19)</sup>。このことより、男性看護師の傾向として男女がともに家庭での役割を担うことに前向きな意識を持っており、男性自身の性別役割分業意識が仕事と育児の調整のあり方と関連する<sup>20)</sup>ことから、主体的に子育てに関わることにつながったとも考えられる。

加えて、対象者は趣味などの自分の時間も

大切にしたいと思い、調整して時間を捻出していた。成人にとって趣味は、自らの能力を発揮し自己実現を果たす機会のひとつになる。子育てと仕事に明け暮れるのみならず、趣味に向き合う充実した時間を持つことは、バーンアウトを防ぎ、日々の活力になることも期待できる。男性看護師は、自分の将来像を持ちながらもライフイベントによって働き方や私生活を調整してワーク・ライフ・バランスの実現をはかる<sup>21)</sup>ことから、自分のための余暇の時間の確保も、日々の生活の充実のために重要である。

## VII 研究の限界と今後の課題

本研究は子育てに関わる6名の男性看護師から得られた結果であり、家族背景、就業背景は多様であるため一般化することは難しい。対象者の子の年齢、人数、家族等の支援者の有無により、子育てへの関わりに差異がある可能性がある。また勤務体制や労働時間によっても仕事と生活の時間配分に影響を及ぼす可能性がある。しかし、夜勤・交代制勤務で働く男性看護師の生活を、父親の子育ての視点から明らかにしたことは、今後の男性看護師への支援の一助となると考える。

今後、男性看護師の増加に伴い、子育てに向き合う男性看護師も増えていくと予測される。安心して子育てし、充実した生活を送るためには、希望する者が必要な休暇を取得できるような勤務体制の調整、男性看護師の子育てについて生活の見通しなどの情報が得やすい環境づくり、上司や同僚の受容的な態度が重要であると示唆された。しかし、父親が母親とともに子育てすることが一般的になったのは近年のことであり、上司においても男性看護師への支援の経験が乏しい可能性がある。子育てに向き合う男性看護師の上司にあたる看護管理職の認識や行動については、今後明らかにしていく必要がある。

## VIII 結論

乳幼児期の子を持つ男性看護師の子育てへの関わりや思いは【子育ての一員として関わっている自負】【交代制勤務の強みを活かした時間の調整】【育休取得のあり方を考える経験】【父親としての存在価値を見出すこと】【家庭と仕事との折り合いをつける難しさ】の5つのカテゴリーに分類された。対象者は交代制勤務の強みを活かして家事や育児に関わり、夫婦で協力して家庭を支えていると自負していた。子育てを通して父親である自分の存在価値を見出し、夜勤をしながらの家事、育児に負担を感じつつも折り合いをつけようとしていた。男性看護師への子育て支援として、ピアサポートを活かして子育ての情報交換ができる環境、仕事と家庭の両立支援のための勤務の調整と情報提供、上司や同僚の受容的態度の重要性が示唆された。

## 付記

本研究の一部は新潟青陵学会第10回学術集会にて発表した。また本研究はJSPS科研費若手研究 (B) 25862126の助成を受けて実施した。

## 謝辞

本研究の実施にあたり多大なるご協力を頂いた病院の看護部および男性看護師の皆様に深謝いたします。

## 文献

- 1) 厚生労働省. 平成30年衛生行政報告例(就業医療関係者)の概況. <<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei/18/dl/gaikyo.pdf>>. 2019年11月7日.
- 2) 山根一美, 井上祐子, 倉田節子, 小河育恵, 岡須美恵. 中堅看護師から中間看護管理者への役割移行に伴う支援に関する文献検討. ヒューマンケア研究学会誌. 2013; 5(1): 79-83.
- 3) 内閣府. 平成28年度男女共同参画社会に関する世論調査. <<https://survey.gov-online.go.jp/h28/h28-danjo/2-2.html28>>. 2019年12月1日.
- 4) 金澤悠喜, 加納尚美. 1980年以降の日本における父親の子育て役割の変遷に関する医療分野関連文献レビュー. 茨城県母性衛生学会誌. 2018; (36): 1-8.
- 5) 厚生労働省. 2018年度雇用均等基本調査. <<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/71-30r/07.pdf>>. 2019年11月7日.
- 6) 三神由起子, 高田谷久美子, 高頭泰子, 宮本佳代子, 四條美由紀. 看護師にみられる育児における不安やストレスの特徴. 山梨大学看護学会誌. 2006; 5(1): 17-23.
- 7) 井上誠, 土路生明美, 鴨下加代, 近藤美也子, 伊藤良子, 麻生浩司. 共働きをしながら幼児期の子どもを育てる男性看護師の仕事と育児の両立への思い. 看護・保健科学研究誌. 2017; 17(1): 84-91.
- 8) 深川周平, 佐伯和子. 未就学児を持つ父親の育児参加とその関連要因—地方都市に公務員として就労する父親に焦点を当てて—. 日本公衆衛生看護学会誌. 2016; 5(1): 2-10.
- 9) 船橋恵子. 現代父親役割の比較社会的検討. 136-168. 東京: 早稲田大学出版会; 1998.
- 10) 厚生労働省. 平成30年度版過労死等防止対策白書. <<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/karoushi/18/index.html>>. 2019年11月25日.
- 11) 岩下真由美, 高田昌代. 子育てのライフステージにある看護師のキャリア継続に関連する要因. 日本管理学会誌. 2012; 16(1): 45-56.

- 12) 武井馨世, 吉田亜未, 佐々木優香, 坂口けさみ. 父親の育児休業取得の意義に関する研究 育児休業を取得した父親及び母親へのインタビュー調査を通して. 長野県母子衛生学会誌. 2013; (15): 28-35.
- 13) 独立行政法人労働政策研究研修機構. 仕事と家庭の両立支援に関わる調査<[https://www.jil.go.jp/institute/research/2007/documents/037/037\\_02.pdf](https://www.jil.go.jp/institute/research/2007/documents/037/037_02.pdf)>. 2019年12月1日.
- 14) 酒井伸隆, 南貴博, 松井諭, 大江真吾, 谷本千恵. 精神科男性看護師のワークライフバランスと支援ニーズの実態 医療介護職の妻を持つ子育て世代へのインタビューより. 日本看護学会論文集. 看護管理. 2016; (46): 270-273.
- 15) 鈴木陽子. 平成29年度 厚生労働省委託調査. 男性の子育て参加の現状と課題. <<https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2019/06/diversity190625.pdf>>. 2019年11月29日.
- 16) 岡本祐子. 育児による親の発達とそれを支える家族要因に関する研究. 広島大学大学院教育学研究科紀要. 2002; (50): 333-339.
- 17) 吉野純. 「親の発達」の概念分析. 日本小児看護学会誌. 2014; 23(2): 25-33.
- 18) 鈴木紀子. 父親の育児休業(第1報). 母性衛生. 2013; 54(2): 335-345.
- 19) 小島さやか. 男性看護師の育児休業取得および子育ての実態と促進要因. 新潟青陵学会誌. 2016; 8(3): 19-28.
- 20) 小笠原祐子. 性別役割分業意識の多源性と父親による仕事と育児の調整. 季刊家計経済研究. 2009; (8): 34-42.
- 21) 加藤明尚, 山田覚. 看護師のワークライフバランスの影響要因. 高知県立大学紀要. 2014; (64): 19-29.